# 特集 夏期集中講座・ゼミ合宿

# 〝基地の島〟で戦争を学ぶ

## 沖縄ジャーナリズム論

文学部人文・ジャーナリズム学科の学生が、「オキナワ」と向き合う夏期集中講座「沖縄ジャーナリズム論」（担当・山田健太准教授）が今夏、沖縄タイムス社の協力講座として初めて行われた（9月5日～9日、学生16人が参加）。

太平洋戦争で唯一地上戦が展開され、米普天間移設など米軍基地問題に揺れる沖縄。学生たちは、複雑な現代史を持つ沖縄の新聞社や戦争の〝爪痕（つめあと）〟を残す現地を訪ね、関係者にインタビュー。元沖縄県知事の大田昌秀氏、前宜野湾市長の伊波洋一氏、沖縄タイムス社の長元朝浩取締役論説委員長ら編集陣、米国海兵隊在日海兵隊基地のロバート・エルドリッジ外交政策部次長ら多彩な人々だ。

普天間基地、嘉手納基地、辺野古テント村訪問、そして基地問題における本土と沖縄との報道比較……。学生たちはさまざまな体験から何を感じたか。参加した2学生に寄稿してもらった。

## 元県知事や地元新聞社訪ねて聞いて……濃密な5日間

▲ 辺野古テント村では基地移設反対の座り込みが続く

▶ 沖縄市（ゴザ）の資料館で説明を聞く学生たち

▲ 海兵隊司令部の施設内でエルドリッジさんと共に

▲ 元沖縄県知事の大田昌秀さんにインタビュー

## 寄稿

### 仮谷雄輔（文2）

## 双方の視点で考える 現地での学習で学んだ

「沖縄ジャーナリズム論」を通じて、私は沖縄のことについて何も知らなかったと実感しました。沖縄本島の人の立場で考えず、何の知識もないままに沖縄の多くの問題は何となくアメリカが悪いと決めつけていました。

▲ 沖縄タイムスの長元論説委員長（右端）の話を聞く仮谷さん（学生の右から2人目）

実際沖縄を訪れ、米軍基地が沖縄のどのくらいを占めているのか自分の目で確認し、現地の新聞社からみた沖縄の状況や記者の方々の意見や、元県知事や元議員、前市長の方々からお話を伺い、貴重な沖縄戦の体験を語ってもらいました。

沖縄の研究者の方からの視点として、沖縄を代表する琉球大学や、米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学の先生方から現状を踏まえた今後の対策を示してもらいました。それらの意見とは逆の立場で、米海兵隊の視点からの沖縄への貢献や海兵隊が沖縄にあることのメリットも聞くことができました。

5日間という短期間に濃密に組まれたプログラムにより、現地で得た知識や意見、考え方をいまだに整理できていない部分もあります。また、私の事前学習や知識不足により理解できないことが多かったのですが、現地を視察し、さまざまな立場の方の意見を伺い、本や資料を読んだり見たりするだけでは得られない印象に残ったのは、沖縄タイムス社会部長の屋良朝博さんの、なぜ米軍基地は沖縄なのかという問題についての話です。抑止力と地理的優位性を挙げる日本政府を、屋良さんが普天間に配備されたヘリコプターの数や過去の実戦を踏まえたデータにより論破していくのが分かりやすく面白かったです。

しかし、アメリカ海兵隊のロバート・エルドリッジさんによる地域貢献の話や地域住民に対する「あまりに感情的過ぎないか」という言葉にも説得力があり、どちらが正しいのか、いまだに自分の意見が持てません。

また、今回のプログラムでは沖縄の基地問題だけではなく自然に触れる機会もあり、カヌー体験をしました。

沖縄と米軍の問題ばかり触れていたので、息抜きのつもりで楽しんでいました。しかし、カヌーをした大浦湾には基地移設問題があり、地元住民がきれいな海を守るために座り込みを7年も続けている状況や米軍基地のフェンスに基地撤収を呼び掛けるフラッグを結びつけているのを目の当たりにして、沖縄と基地の問題は地元住民にとってとても身近であることを、強く実感しました。

今回の学習で、沖縄問題だけでなく、物事を考えるには両方の視点に立って考えることの重要性がわかりました。

### 山田絢子（文2）

## 叫ぶ人の声を伝える メディアの力信じたい

語学を学ぶなら辞書、歴史を学ぶなら歴史書、知りたいことがあればインターネット、いつのころからか私の「知」は、紙や電波に頼ったものになっていました。

この夏、沖縄ジャーナリズム論の短期授業に参加し、私の「学ぶ」ことの意識は変わりました。実際に戦争を体験した方や基地問題に携わる方の話を聞き、紙や電波からは感じない、今を「生きた歴史」、「今に生きる問題」に触れることができました。

▲ 沖縄タイムス印刷工場見学の山田絢子さん（紺のシャツでバッグをタスキがけ）ら学生たち

机で勉強する時にはわからない、その土地のにおいや空気を肌で感じ、これぞフィールドワークと、「学ぶ」ことを全身で実感しました。また、これまで意識したことのなかった「壁」を感じる機会でもありました。

沖縄の人は本土の人の差を今に残していることを痛感しました。沖縄の人は今の問題を考える上で、歴史を学ぶことを大切にするそうです。〈他人に痛みつけられても眠れるけれど、他人を痛みつけては眠れない〉というのが、昔から変わらない沖縄の人の心情です。

ある問題を考える時、その問題に触れていることを話す際、「ないちの人」、という言い方をします。現在でも琉球の民であることの意識を大事にしていて、日本と琉球とでは nation 意識に違いがあるようです。

かつて琉球王国だった沖縄は、日本の侵攻、米国の占領を受けた過去があります。そんな過去が、本土と沖縄との温度差はなく、「人」を理解することも重要だと感じました。

「壁」や温度差は、なかなか目に見えるものではありません。しかしその差が表れる象徴的なものとして、教育とメディアがあると思います。沖縄でて新聞（沖縄タイムス）を読みましたが、そこには基地問題や沖縄戦に関する教科書問題についての記事が一面を占めていました。

神奈川での普段の生活ではあまり触れることがない問題が、沖縄では常に議論されています。辺野古の海での基地移設反対の座り込みは、9月8日で2699日目を迎えました。メディアはそれらの事実を伝え、共有することができる懸け橋になります。

さまざまな立場に置かれた人たちのそれぞれの主張があります。その主張を冷静かつ客観的に見据えることができるのもメディアです。

沖縄でたくさんの方の話を聞いて、相田みつをさんの詩をひとつ思い出しました。

〈セトモノとセトモノとぶつかりっこするとすぐこわれちゃう　どっちかやわらかければだいじょうぶ　やわらかいこころを持ちましょう〉

いつまでも沖縄の人たちのやわらかさに甘えることはできません。海の向こうで叫ぶ人の声を伝えること、聴くことが求められているのだと感じました。